

# 中国山東省膠東地域海草屋の技術文化研究

王 嶺・坪郷英彦

## 第一章 はじめに

### 1、山東省膠東地域の海草屋

中国は領域が広く、また地形や気候の多様な国である。国内各地域ではさまざまな自然条件と生活上の必要に適応するために、各種の異なった形式の住居建築が作りあげられてきた。山東省沿岸部は秦朝から膠東地域と呼ばれる。この地域の民家の特色は海草屋である（写真1-1）。海草屋とは、家の屋根が主に沿海の海草を材料として作られた住居全体を示す。使用される海草は日本でアマモ、スゲアマモ、エビアマモと呼ばれる種類で、沿岸部の浅海5～10m海域で生育している。秋になると、北からの風によって成熟した海草が海岸に流れつく。人々は熊手を使ってその海草を採り、海岸の砂浜で日に晒す。干した海草を荷車で家へ運ぶ。かつては海草は主として農民が肥料としていたが、膠東地域では屋根を葺くのにも利用していた。

海草屋は冬に暖かく、夏に涼しいという特徴を持っている。また、海草はにがりを含むため、海草と黄泥で固めてある屋根は100年たっても腐乱せず、耐久性にも優れている。その上、海草は燃えにくいので、火事に強いという特徴を持っている。威海市では、元・明・清時代には海草屋が最も盛んに作られたとされる。1949年以前は、山東省沿岸部の青島地区、煙台地区、威海地区の農村と漁村の主な住宅の屋根形式であった。



写真1-1 海草屋

## 2、研究目的と研究方法

### (1) 研究の目的

文化とはある民族・地域・社会でつくり出され、その社会の人々に共有・習得されながら受け継がれてきた固有の行動様式・生活様式の総体である。海草利用文化は海草が採集できる沿岸部で人々が暮らしの中で行う海草利用の行動様式・生活様式である。

海草利用の研究はこれまで肥料としての利用を中心として行われてきた。日本での肥料利用文化であるが、この中で印南の行ったコアマモの多方面での利用は参考となるが、屋根材料としての利用は報告されていない（印南、2011）。中国における海草屋の研究は中国山東省海岸部に限り、主に海草屋の歴史、技術、地理的分布を中心とした建築学的研究であった。海草の屋根葺きへの利用及び慣行に関する文化研究は少ない。山東省沿岸部特に威海市では海草を利用して屋根を葺き、地域的特色のある民家を形成した。本論文は中国威海市の海草利用文化について海草屋根を中心として研究を行うことを目的としている。

### (2) 研究の方法

物質文化とは「人類が生きていくための物的手段の全体」あるいは「人類が生きていくための物的手段をめぐる文化要素の全体」と定義できる。物質文化を分析するにあたり、次の3つの点をとりあげて考えることが必要である（祖父江、大給、中村、大塚、1978）。

- ① 物質文化を作り出す意味、アイデア
- ② 物質文化を作り出す行為そのもの
- ③ 作り出されたもの

物質文化の研究方法を本研究にあてはめ、3つの研究項目を設定した。

- ① 家を守る屋根の象徴性
- ② 屋根葺きの技術、道具、村の相互扶助
- ③ 海草屋の拡がり

また、岡正雄の物質文化の考えでは、民具を一連の仕事の中でみるという考えである（岡、1958）。仕事とは、技術の複合体であり、技術は様々な道具で構成されている。つまり、道具や材料が選択的に使われた技術となり、技術が集合して仕事となる。仕事とは始めと終わりがある1つのまとまった行動の体系であり、人的連携や、地理的季節的条件も含んだものである。この仕事に焦点をあてることは、祖父江らの文化の総体をとらえる見方であり、しかも社会的側面から見る見方ではなく、技

術を基にした文化から見る見方をとるということである（祖父江、大給、中村、大塚、1978）。文化人類学や民俗学の文化を把握するという目的は同じである。この仕事に注目して道具を見ると、道具は、仕事の中でどのような役割を持っているかが理解できると考える。

2年間に3回の聞き取り調査を実施した。第一回目は2011年9月20日～24日の間で威海市に行った。第二回目は2012年2月23日～28日で、第三回目は9月20日～29日である。

筆者は多くの海草屋が存在している港西鎮、成山鎮、寧津所鎮を調査した。具体的な調査場所は港西鎮の巍巍村、成山鎮の唐家庄村、寧津所鎮の林家流村、馬家砦村、東褚島村、寧津所村、小岔口村、東墩村、橋上村、劉村、蘆家庄村の計11村である。図1-1及び1-2の中で番号を付ける唐家庄村、林家流村、馬家砦村、東褚島村は漁村で海草採集地であり、他の村は農村である。

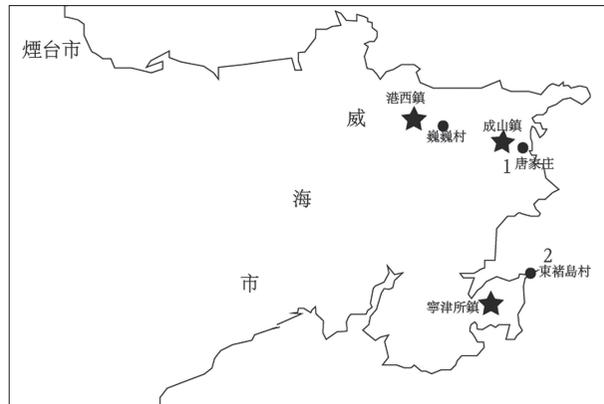


図1-1 調査対象の鎮と村 (★：鎮、●：村)

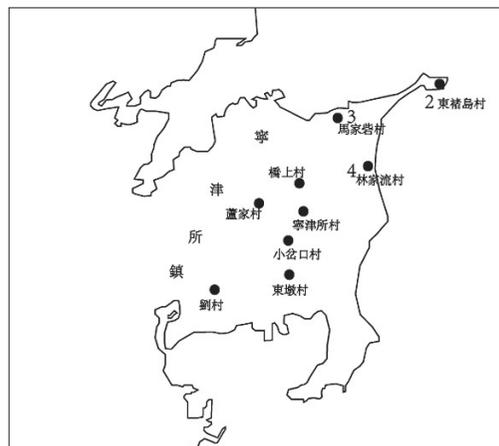


図1-2 調査対象の寧津所鎮の村

### 3、海草屋に関する先行研究

海草屋の研究が始まったのは1980年代末からである。研究内容は主として海草屋の配置、特徴、歴史文化、生態性の特徴、保護と利用などである。

「山東省志 民俗志」の「住宅」の頃では、民俗学的視点から山東省沿岸部の特色民家として、海草を利用して屋根を葺いたことが記述してあり、海草屋は耐久性に富み、冬暖かく、夏涼しいという特徴があることを明らかにしている（山東省民俗志、1996、245）。

丘恒興の「中国の民俗を訪ねて」は中国各地の特徴的な民俗を紹介したものである。この中の「山東省編」では海草で葺いた屋根の形、特徴が簡単に説明してあり、「地元の漁民にとって海草葺きの屋根は高級建材の一つ」とある（丘恒興、1989、64～68）。

周洪才は1995年に「石島湾畔海草屋」で威海市の石島における海草屋の発生の歴史的条件、海草屋の特徴と文化的価値を述べ、石島における海草屋は絶滅の危機にあり、早く保護することを提案している（周、1995）。

張潤武と薛立は1996年に「中国民居第七回学術会議」で海草屋の歴史文化、平面配置を明らかにした。そして山東省の半島の地域性を持っている民家として、海草屋をさらに研究する必要があると提言している（張、薛、1996）。

これらの報告では建築的提言が多いが、まとまったものとして李文夫著「威海市民居海草屋歴史文化研究」、陳喆著「原生态建築 胶東海草调研」、劉志鋼著「探訪中国稀世民居海草屋」がある。

#### （1）「威海市民居海草屋歴史文化研究」

李文夫著「威海市民居海草屋歴史文化研究」ははじめて系統的に海草屋を研究したものである（李文夫、2004）。李文夫は「文登県誌」（威海市は文登県に所属）、「栄成県誌」、「栄成民俗」の文献を参考にし、威海市において海草屋が存在している村落で調査を行った。威海市は古くから重要な漁業と塩の産地であり、また軍事の要地であり、漁民、製塩業者と軍人が海草屋に住んだ。地元の住民は威海の沿岸部に人が5000年前住み始めると同時に、海草屋の建築が行われたと李文夫は考える。元・明時代に海草屋が最も多く作られた。明・清時代、一般庶民は海草屋根に住んでいた。李文夫のこれらの考えは住居の壁面を構成する石材の組み方及び住民が持つ建立年代の伝承から考察されたものである。結果として威海市の沿岸部と島の600の村に伝統的な海草屋が分布していることを明らかにしている。

李文夫は建築学の視点から、伝統的な海草屋の作り方を記録し、民俗学の視点から

は海草屋の建築習俗と生活習俗を考察した。

## (2) 「原生態建築 膠東海草調研」

陳喆著「原生態建築 膠東海草調研」では海草と石で建てた伝統的な海草屋の生態性を明らかにしている(陳、2002)。生態性とは建築と周囲の自然環境によく調和し、持続可能な発展をすることである。原生態建築とは生態性という特性を持っている建築という意味である。

### A、歴史と環境

煙台市の長島県長北村の5000年前の氏族の住宅の遺跡によると、この構造は現在の海草屋に似ている。しかし、屋根を何の草で葺いていたのかは不明である。明朝以降、山東省沿岸部には草屋根について、「文登県誌」と「榮成県誌」に記録が多いが、具体的な草の種類は記録されていない。「威海市誌」によると、1949年以前、山東省沿岸部の草屋根は3種類ある。海陽、牟平、乳山、文登などの山地の住宅は主に茅葺き屋根である。西部沿岸の蓬萊、黄県などの平原には、麦藁で屋根を葺いている。威海市、榮成市には海草屋根が多い。

### B、環境と居住性

海草屋の特色として次の3点を挙げている。

- a. 建築の材料で、厚い海草屋根は断熱保温の役割を果たしている。
- b. 住宅の配置について、海草屋の庭は幅がとても狭い。東西側の棟の距離は3~4mである。庭には何種類かの樹木が植えられている。これらは夏に気候を調節する作用がある。冬になると、狭い庭が冷たい風を妨げる役割を果たす。
- c. 海草屋は正面を海に向け、背面を北側の山に向けて建っている。村落の隣接した住宅の壁は常に繋がる。横一列の住宅を形成し、街道も狭い。このような村落の配置は冬に寒い風を防ぐ役割を果たす。

## (3) 「探訪中国稀世民居海草屋」

劉志鋼は中国撮影協会の会員で、民俗的事象の撮影の視点から、海草屋の建築様式、建築習俗を捉えた。「探訪中国稀世民居海草屋」は劉志鋼が海草屋を中心として、山東省沿岸部の海洋文化を整理したものである(劉、2008)。この中で、海草屋の形成、種類、建築の習俗を明らかにしている。また、海草屋のある地域の伝統的な文化である漁業生産方式、農業生産方式、民間信仰について記述している。

### A、漁業と海草屋

歴史的に海草屋村落の形成には3つの型があることを示した。1つ目は戦争、災害

の原因で他の地方の人が威海市に移動して、村落を形成した。2つ目は大きい村から抜け出し、新しい村落を形成した。3つ目は明朝時代から威海市の沿岸を防衛するために、皇帝から田を授かった軍人が海草屋の村を作った（注1）。

## B、海草屋の建築

劉は家の建て方について、海草屋の配置は北方の民家と同じであり、三合院と四合院が主な形式であることを示した。

## C、海草屋と生業

山東省沿岸部の村は漁村と農村に分けられ、漁民には3つの生業の型があることを示した。1つは自分の船、網を持って、地先村の磯漁場で漁撈を行った漁民である。次は耕地が少なく、農閑期に漁行に雇用された農民である。3つ目は船と網を持ち、副業として、海で漁撈する農民である。

## D、家に関する信仰

山東省沿岸部の民間信仰は主に天地神、竜王、海神娘娘、土地神、竈の神、福の神である。天地神は家族を守る神である。婚礼の時、新郎新婦が天地神を拝してから向かい合って礼拝する儀式を行う。また、来年の家族の平安を祈るために、春節に天地神を祭る。

漁村では竜王を海神として祭る。海神娘娘は「天後」とも呼ばれ、漁民にとって重要な神である。栄成市の石島に今も海神娘娘を祭る天後宮が存在している。漁民は竜王と海神娘娘を海神とする。漁村の海神廟で竜王と海神娘娘を祭っている。穀雨は魚類が近海へ帰る日だと考えられる。漁民の安全と豊漁のために、この日に海祭を行う。供え物は屠殺した豚、菓子、酒などがある。線香を焚き、爆竹を鳴らした後、漁民は順番に海に向けて拝する。

山東省の内陸地方に比較して、竜王と海神娘娘は重要な神様である。これは、この地域の漁業生産に関係がある。しかし、農村では竜王は雨神として祭る。毎年の農曆6月13日に雨乞いの祭りを行った。日照りが続く時にも、竜王廟へ雨乞いをする。

以前、農村の土地廟に土地神を祭っていた。土地神は土を主管する神である。住宅を建てる前に、土地神を祭らなければならない。また、農民は豊作になるために、土地神を祭る。

竈の神は家庭の飲食料理の神で、「灶王爺」と呼ばれる。その主要な任務は家庭の1年間の家族の関係、飲食などの日常生活と経済状態など、家庭の状況を「玉皇大帝」という神様（民間信仰の神の中で最も権威のある神）に詳しく報告することである。家庭が円満で幸せな家は神が守ってくださり、ひどく乱れた家は神が失望して咎められるという信仰心を持つ。毎年の12月23日に竈の神を祭る。

福の神は金をもたらす神である。一般家庭は福の神を祭っている。毎年の春節には金運のために必ず福の神を祭る。

## 第二章 威海市の概要

### 1、威海市の位置

威海市は東経121°11′-122°42′、北緯36°41′-37°35′に位置する。威海市は山東半島の東部一帯を占め、北東岸は黄海に面し、北方は遼東半島と相対し、東方は朝鮮半島に近い。北岸の市区部の湾内には劉公島が浮かぶ。山東半島最東端の成山角（岬）は古来から朝鮮半島との交通の要衝であった。現在の威海市は1987年に県級市から地級市に昇格し、1つの区（環翠区）と3つの県級市（榮成市、文登市、乳山市）を管轄している。威海市の総面積は5698平方キロメートルである。海岸線の長さは985.9km<sup>2</sup>で、山東省の海岸線の33%を占める。総人口は約250万人である。

### 2、威海市の自然環境

威海市はちょうど中国の南北の中間に位置して、年平均気温は11.9℃、年平均降水量は800ミリメートル、北温帯の季節風型の大陸性気候に属する。

2000年から2009年の5年間の威海市、北京、東京、福島の年平均降水量は威海市が811mm、北京が463mm、東京が1,802mm、福島が1,200mmである。降水量は威海市と大体同じ緯度の都市北京と比較して多いものの、日本での大体同じ緯度の都市東京、福島と比べて少ない。

### 3、威海市の産業

威海市は丘陵地帯である。海岸線は曲折し、港湾と岬が多い。黄海、渤海、東海の3つの大きい漁場があり、漁業は昔から発達している。威海海域は広大で、浅海は潮間帯では豊富な生物資源を持っている。車えび、海鼠、あわび、その他の貝類、また色々な経済的取引の対象となる魚類など300種類あまりの海産物を盛んに産出している。植物の中で、藻類は主にコンブ、ワカメ、テングサ、ノリ、海草などがある。農業は主に小麦、トウモロコシなどの栽培である。経済作物は主に落花生、ダイズなどである。威海市は中国で早期の対外貿易港の一つで、世界の100あまりの国、地域と貿易関係を続けている。

### 第三章 海草について

#### 1、海草の種類

アマモは北半球温帯域沿岸の浅海に広く生える海草である。中国では山東省、遼寧省、河北省の沿岸に分布している。山東省に多い海草はアマモ科の海草の3種類である。これらはアマモ属のアマモ (*zostera, marinal*) とスゲアマモ (*zosteracaespitosamiki*)、スガモ属のエビアマモ (*phyiiospadixjapnoicas*) である。アマモとスゲアマモの生育場所は海の水深1m~10mまでの砂泥の所である。この2種類のアマモは混合して生育している。アマモの葉の長さは20cm~100cm、幅は3mm~6mmである。スゲアマモの葉の長さは20cm~140cm、幅は3~6mmである。一方、エビ



写真5-1 威海市沿岸部のアマモ



写真5-2 威海市沿岸部のアマモ

アマモは海の岩礁に生育している。エビアマモの葉の長さは25cm～100cm、幅は1mm～2.5mmである。

威海市の住民は海草の学名を知らず、「海带草」、「海苔草」と呼んでいる。一般的に苫匠は海草の葉の幅によって海草を「鋼線草」、「二道草」及び「広葉草」の3種類に分ける。「鋼線草」はエビアマモのことで、葉の幅が1mm～2mmで、海の岩礁に生育している。「二道草」と「広葉草」は海の砂泥の所で生育しているアマモとスゲアマモである。「二道草」は葉の幅が3mm～4mmで、1m～5m浅い海のアマモとスゲアマモを指す。「広葉草」は葉の幅が5mm～6mmで、5m～10m深い海で生育しているアマモとスゲアマモを指す。

1990年、世界の海草分布の面積は約17.7万km<sup>2</sup>あったが、2000年までの10年の間に2.6万km<sup>2</sup>の海草藻場が減少した（郭棟、2010）。1958年頃までは、威海市の沿岸浅場には豊かなアマモの藻場が分布していた。しかし、1980年頃にはほぼ壊滅状態になった（注2）。以前、水深1～2mの所に成長していたアマモは4～5mの深さの所にしかない。

## 2、海草の採集とその権利

### （1）海草の採集地

海草の採集地は主に沿岸部の漁村である。筆者は調査した採集地の林家流村、東褚島村、馬家砦村、唐家庄村は全部漁村である。林家流村は半農半漁の村である。林家流村は漁村としては耕地が少なく、1人は1ムーの耕地があるだけである。現在、村の漁業会社は船を持っているが、個人でも船を持っている者がいる。漁業が主な生業である。このような漁村は海岸線が長いので、海草採集地になった。東褚島は荣成市の最も東方の島で、面積は0.6km<sup>2</sup>である。東褚島は東、南、北の三面が海に面しているので、以前は寧津所鎮で一番広い海草の採集地であった。成山鎮の海岸線の長さは100kmで、荣成市の海岸の5分の1を占めている。成山鎮の唐家庄村は海に面した細く長い村で、海岸線の長さは3kmである。海草を採集しやすいので、この周辺の重要な海草採集地になった。

### （2）海草採集

海草採集の道具は主に、熊手とフォークである。この2つの道具は全部農具である。熊手は鉄製と竹製の2種類があり、海の中の海草を海岸へ引き上げるのに用いる。フォークはその引き上げた海草に差し込んで、海岸の砂浜まで運搬するのに使用する。また、海草を干す時、フォークでひっくり返す。荷車は干した海草を運搬する道具である。以前は荷車に山のように積み上げて、人（牛馬）が引いた。今はそれがトラッ



写真5-3 海草採集の熊手



写真5-4 海草採集のフォーク

クにとって代わった。現在、普通の農家に荷車はなくなった。

夜、風が吹いたら、海から出た海草の葉は波によって切られ、水面に浮かぶ。それが北からの風によって海岸に流れつく。翌日の朝、村民は必ず熊手を持って海岸へ海草を採りに行った。海、砂浜、岩礁の隙に多くの海草が吹き寄せられた。男性は朝早めに海岸へ行き、熊手を使ってその海草を採り、海岸の砂浜へ運搬した。女性はこの海草を広い砂浜へ運搬した。女性は海草を分類し、乾燥した。海草の縄で乾燥した海草を直径60cmの束にして、積み上げた。そのため、昔から漁村の砂浜には数えきれないほどの海草が積まれていた。採集した海草は自分でも使用するが、販売した海草の収入は生活費の足しになった。

### (3) 海草採集の権利

海草採集権利は海草の数量と社会制度の変化に伴って変化してきた。社会制度は1958年以前、1958年～1980年の人民公社時代、1980年以降に分けられる。以下、それぞれの時期について海草採集権利の変化を説明する。

#### A、1958年以前の採集権利

1958年以前、威海市で海苔の養殖が始まっていない時代は海に海草があふれていた。風によって吹き寄せられた海草の高さは人の背丈よりも高かった。海草の量が多いので、人々は自由に採集できた。海岸の権利は漁村が所有したが、農村の人は堆肥、燃料や海草屋を造るために、海草を自由に採ってもよかった。漁村の人は自分が使用するだけでなく、販売するために、海草を採集することもあった。海草を採り、乾燥させるのは労力と時間がかかる仕事である。漁村では鋼線草の採集のみに従事している人がいた。海草を買う者は主に漁村の周囲の農村の人である。当時、海草の値段は1斤が0.02～0.03元であった。他の村の者は漁村に親戚がいれば、親戚に頼んで、海草を採集してもらうこともあった。

#### B、1958年～1980年までの採集権利

1958年～1980年までは、人民公社の時代である。この間、海苔、魚、エビなどの人工養殖にとまって、海草は減少してきた。海草屋を造るのに必要な海草は足りなくなった。隣海の漁村は海岸の権利を所有するので、海草の数量が減少するに従って、海草がある海岸を保護したこともある。この時代、農村の人は自由に海草を採集できず、人民公社が海草を集めて、販売した。

唐家庄村では、冬に北風が吹いたら、村の生産隊は村民を集め、一緒に海草を採集した。採集した海草は村のものになった。村民は新しい海草屋を建てる時に、村から海草を買った。当時、海草の値段は1斤が0.02～0.03元であった。毎年、採集した海草の量は異なったが、大体の量は40～50万斤であった。その頃、この地域以外の海草が少なくなったので、唐家庄村から海草を買った人は非常に多かった。

林家流村では村民総出で、海草を採集した。これとは別に、林家流村の村民は自由に採集することができた。他の村の者は採集することができなかった。海草の値段は1斤が0.02～0.05元であった。この値段は安いので、林家流村の村民は大部分村から海草を買った。この金や他の村の者に販売した海草の金は村の収入になった。1967年から、林家流村の海草の量はだんだん減少した。1967年以前は1年間に100万斤採れていた海草が、1967年以降、20万から40万斤しか採れなかった。とりわけ、鋼線草の量はとても少なかった。林家流村の村民は優先的に鋼線草を買った。他の村の者は鋼線草を買うことが難しくなったので、広葉草を買うほかなかった。

馬家砦村では1960年以降、海草を統一採集し、分配することを始めた。同時に、村では副業隊をつくった。副業隊は主に海苔、魚、海老、貝類などを養殖した。冬になると、海草を採集する仕事をした。副業隊は海草を集め、分類した。乾燥した海草はきちんと積み上げた。この頃、副業隊が採集した海草は1年で100万斤～150万斤であった。馬家砦村は希望する者に海草を分配した。その年に結婚したい者と葺き替えを希望する者は村へ申請した。村は申請によって鋼線草、二道草と広葉草を組み合わせて分配し、残った海草は販売した。この頃、海草の値段は1斤0.02元から0.05元ぐらいであった。最後に残った短い雑海草や広葉草は堆肥にした。個人が海草を採集することを防ぐために、副業隊は海岸を巡視する責任を負った。

東褚島村は海岸の権利を所有していたので、海草の量の減少とともに、海草が生育する海岸を保護したこともある。東褚島村では海岸の海草を集め、販売した。この頃、毎年採集した海草量が100万斤から200万斤であった。一方、村民が少量の海草を採集することは許されていたが、他の村の者は海草を採集することは禁止した。そのため、臨海から遠い農村の人々は臨海村から海草を購入しなければならなかった。

### C、1980年以降の採集権利

1980年に人民公社の制度は廃止となった。農村では人口によって農地を配分した。漁村の漁業会社も成立した。個人は海で海産物を養殖するために、権利金を払って、海岸の使用権利を得る。

唐家庄村の村民袁毓品は1983年から毎年村に200元支払い、海岸3kmの海草の採集権利を取得した。1983～1990年の間、毎年20～30万斤の海草が採れた。当時、乾燥した海草の値段は1斤で0.05元ぐらいであった。1990年代になると、海草の数量は減少したが、村に払う権利金は3000元に増えた。その頃、海草の値段は0.3元から0.5元ぐらいであった。1992年村は浅海の権利を別の人に移して、エビを養殖した。海草の量が減少したので、袁毓品は村に料金に払わなかった。しかし、彼はずっと海草を採っていた。1997年に白鳥の保護するために、辺りの海岸は白鳥の保護区となった。海産物を養殖することが禁止され、海草が成長し始めた。そして、その周辺は栄成市で唯一海草を採取できるところとなった。2011年、袁毓品は所有していた海岸で10万斤の海草を採った。海草の値段は1斤で4元である。袁毓品によると、威海市、煙台、上海、天津、重慶などの観光地は海草屋を造るために海草を買うが、地元の住民は新しい海草を買うことは少ない。海草の値段が高いので、地元の人古い海草を使用しているという。

林家流村は1987年から浅海の権利を個人に移した。個人は村へ料金を払って、浅海で魚、海老、貝類、海苔などを養殖した。しかし、海岸の権利は村に所属するので、

林家流村の村民は自由に海草を採集することができた。しかし、海草の量は新しい海草屋を建てるには足りなかった。劉学仕は自分の家の屋根を葺き替えるために、1995年の冬に広葉草を2,000斤しか採ることができなかった。浅海で海産物を養殖している者は権利をもっているため、その海草を採集し販売した。2000年以降、林家流村の海岸にはところどころに海草が生育したが、この量では海草屋根葺きには足りない。

馬家砦村では1983年頃、副業隊は解散した。漁業会社ができ、海岸の権利は漁業会社に移した。漁業会社は毎年一定の料金を村へ払い、海草の採集権利を得た。1987年から、馬家砦村は海の権利をもう一度整理した。一部の浅海の権利は個人に移した。個人は村へ権利金を払い、浅海で海産物を養殖することができた。また、個人は自分の領域の海草を採って販売できるようになった。この頃、鋼線草は少なくなり、主に二道草と広葉草が採れた。値段は1斤が0.2元～0.5元であった。1990年代以降、特に海苔の養殖を始めると、海草は全滅した。広葉草も生育しなくなった。住民は屋根の葺き替えのために古い海草を用いた。

東楮島村では1980年以降、海草の採集権利を個人に移した。海草の量と浜の距離の長さによって、個人は1年で20元から100元の料金を村へ払い、海草の採集権利を得た。この頃、海草の値段は1斤で0.2元～0.5元ぐらいであった。1980年ごろ、この地域の住民は煙台市の蓬萊地域から海草を買ったことがある。海草の値段が高いため、1970年代から農村では麦藁、茅で屋根を葺くことが始まった。現在の農村にはすべて全部麦藁と茅で葺いた屋根がある。1980年代から、瓦屋根がだんだん多くなった。1995年以降、海草が少ないので、海草採集の仕事に従事する者はいなくなった。

### 3、海草の利用

威海市では海草を主に建築材料として利用している。次は農業生産の中で、堆肥を作るのに用いられた。1980年代以前の化学肥料を使用しない時期、農民は毎年秋に海草を採って堆肥を作った。長い海草は主に海草屋根葺きに使用する。短く、ばらばらな海草は肥料として利用した。長い広葉草はまぐさ切りで10cm～20cmに切って肥料として利用する。農民はブタ小屋でブタを飼っている。ブタ小屋の側に穴を掘り、この中に豚の糞を少しずつ蓄える。そして、秋になると、麦藁と海草と土を一緒にしてその穴に入れる。1か月後、混ざったものを荷車で田畑へ運搬し、積み重ねて、堆肥を作った。

また、住民は生活の中で海草を燃料として利用している。威海市の住民はオンドルを用い、その燃料に海草が用いられた。普通オンドルの燃料は草や麦藁などである。海草は燃えにくいという特徴を持っている。そこで、住民は寝る前に多くの海草をオ

ンドルに入れる。そうすればオンドルは夜通し暖かかった。漁村では広葉草を採り、燃料として利用していた。海草は燃えにくいので、麦藁と混ぜて一緒に使用すれば、燃えやすくなる。

海草は断熱性が強いという特徴を持っているので、住民は保温材料として利用している。冬になると、水ガメがよく凍結した。それを防ぐために、海草を縄に編み、水ガメの下から上までぐるぐる巻きにした。村民は豚、鶏などを飼うために、家畜の小屋を作った。豚小屋に海草を敷けば、冬になると、豚は海草の上で暖かく寝ることができる。鶏小屋に海草を敷けば、鶏は海草の上に卵を産み、割れることはなかった。鍛冶屋では必ず海草を用意した。鉄器を作る時に熱い鉄器の一端を海草で包むと、手で持つことができたのである。

## 第四章 海草屋の拡がり

### 1、海草屋の分布

海草屋はかつては山東省沿岸部の青島市、煙台市、威海市に分布していたが、今は威海市だけに存在している。特に威海市の管轄する榮成市には多くの海草屋が存在する。

2003年、李文夫は威海市の範囲で全面的に海草屋を調査した。李文夫の調査によると、現在の威海市に存在する海草屋は約7、8千棟あり、農村住宅の4%を占めている。この中で、造られてから300年以上を経ている海草屋は約3～4%、100～200年は約20%、50～100年は30%、50年以下の海草屋は40～50%を占めていると報告している。この建築時期はあくまで壁部分の石積みの技法、材料をもとに判断されており、屋根材の古さはしめしていないが、一度葺くと全面的な葺き替えはされず、部分修理だけが行われる。1980年代以降は主に観光目的で造られたもので、住むために建てられた海草屋は少ない。図3-1は李文夫の調査データによって作成した2003年頃の海草屋分布域である。

李文夫は威海市区の周囲、榮成市、乳山市、文登市の23鎮、600村に海草屋が分布していることを報告している。海草屋の分布面積は1000平方キロメートルくらいである。威海市の985kmの海岸線に沿って、また臨海の漁村から内陸に10km～15kmまでの領域に拡がる。

### 2、対象となる海草屋村

筆者は多くの海草屋が存在している11村を調査したが、その中で唐家庄村、林家流

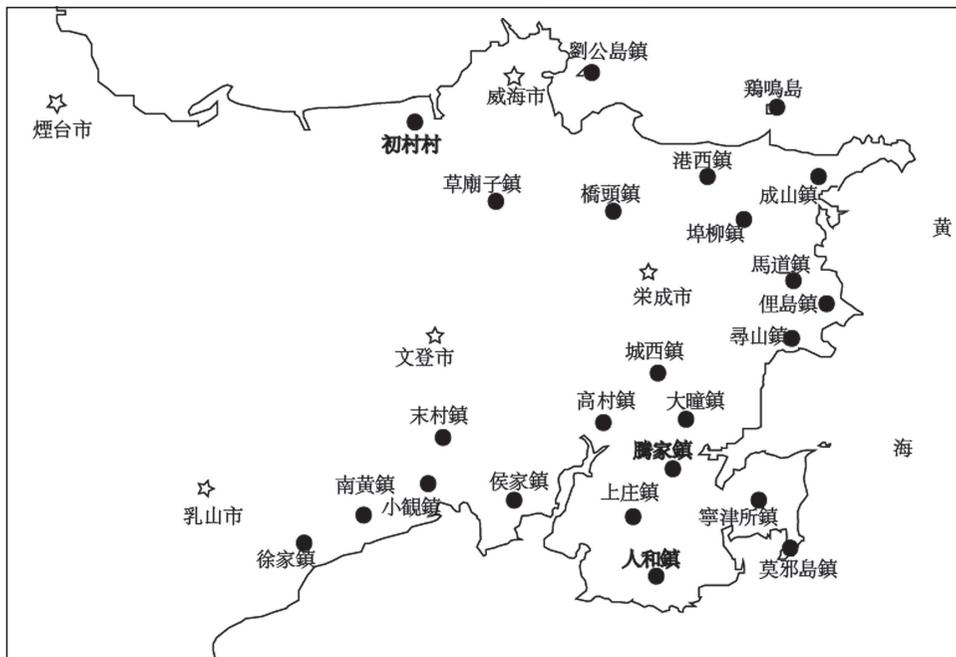


図3-1 李文夫調査の海草屋分布図 (★：市 ●：鎮)

村、馬家砦村、小岔口村、劉村を選択して、村の現状を紹介する。

唐家庄村は海に面する狭く長い村で、海岸線の長さは3kmである(図1-1)。唐家庄村は約100戸の小さい村である。主に唐と袁姓の住民がいる。村民は半農半漁で、昔から重要な海草の採集地である。唐家庄村には30戸の海草屋が存在しており、成山鎮では海草屋が一番多い村である。成山鎮の海岸線の長さは100kmで、榮成市の海岸の5分の1を占めている。

林家流村は半農半漁の村で、林と劉が主な名字である(図1-2)。村の女性と老人は家で農業をし、男性は漁業に従事している。寧津所鎮では主に林家流村、馬家砦村、東楮島村で海草を採取した。林家流村は漁村としては耕地が少なく、1人は1ム(約6R)の耕地があるだけである。現在、村の漁業会社は船を持っているが、個人でも船を持っている者がいる。漁業は主な生産方式である。林家流には400戸の住宅があるが、230戸は海草屋である。しかし、若者は都市で新しい住宅を買うため、海草屋は大部分が空き家である。

寧津所鎮の住宅は3分の2が海草屋である(図1-2)。馬家砦村に400戸の住宅があり、この中の300戸が海草屋である。地元住民は海草屋を大変好むが、海草がないので、新しい海草屋を作ることができない。馬家砦村は臨海の漁村として、昔は重要な海草の採集地であったが、現在、海草は全くない。

小岔口村は1.5km先に海岸があるが、昔から海草は少なかった（図1-2）。以前、小岔口村の70～80戸の住宅は全部海草屋であったが現在は20戸しか残っていない。

劉村の住宅は400戸あるが、この中の200戸は海草屋根である（図1-2）。多くの若い人は都市に出稼ぎに行く。その内は高齢者だけが村に住んで農業を従事している。1つの村の横町に30戸の海草屋があるが、5戸だけ老人が住んでいる。1970年代、若者が結婚する時、花嫁側は花婿側に「住宅は必ず海草屋根である」という条件を出した。海草屋が一番よい住宅と考えられた。以前、村の住宅は全部海草屋根であったが、海草の減少で、1970年代から瓦屋根を現れた。2000年になってからは、ビルが建ちだした。現在の結婚の条件は必ずマンションに住むことである。

## 第五章 屋根葺きの技術

### 1、仕事の概要

屋根葺きの技術を知るために、職人曲栄国、王秉伝、畢可新、劉家珍、張本順、程義東、程洛民、程配賢、程配新から話を聞くことが出来た。

海草屋を作るには苦匠、瓦匠、石匠、大工の4種類の職人が必要である。苦匠は海草屋根を葺く職人であり、瓦匠は左官で壁を作る職人である。また、石匠は山から石を切り出す人であり、大工は木材を組み、梁を作る人である。この他に小工といってまだ技術を身につけていない手伝いがいる。海草屋にとって、一番重要な職人は苦匠である。彼らは副業的職人である。このような職人は農業が主で農閑期に余業として地元や出稼ぎに行き、海草屋の仕事をする。

苦匠は特有の技術を身につけた職人である。苦匠は他の地域の草屋根を葺くことができる。しかし、他の地域の屋根葺き職人は海草屋根を葺くことができない。その原因は海草屋根の構造が普通の草屋根と違うこと、そして、独特の技術を要するからである。海草屋根は2層の草層で構成されている。下層は茅、麦藁などで葺き、表面の上層は海草である。下層の茅や麦藁は堅いので、屋根の骨組みの役割がある。海草は腐りにくいという特徴を持っているので、表面に載せる。

海草屋根を葺くにははじめに瓦匠が芦、葦、高粱、柳条などのすだれ状に編んだ蓆を屋根勾配の木の上に敷き、蓆に黄泥を塗り被せる。それから苦匠の仕事である。次に図5-1に海草屋根の模式断面を示し、苦匠の仕事の順番に従って、屋根葺きの技術を説明する。

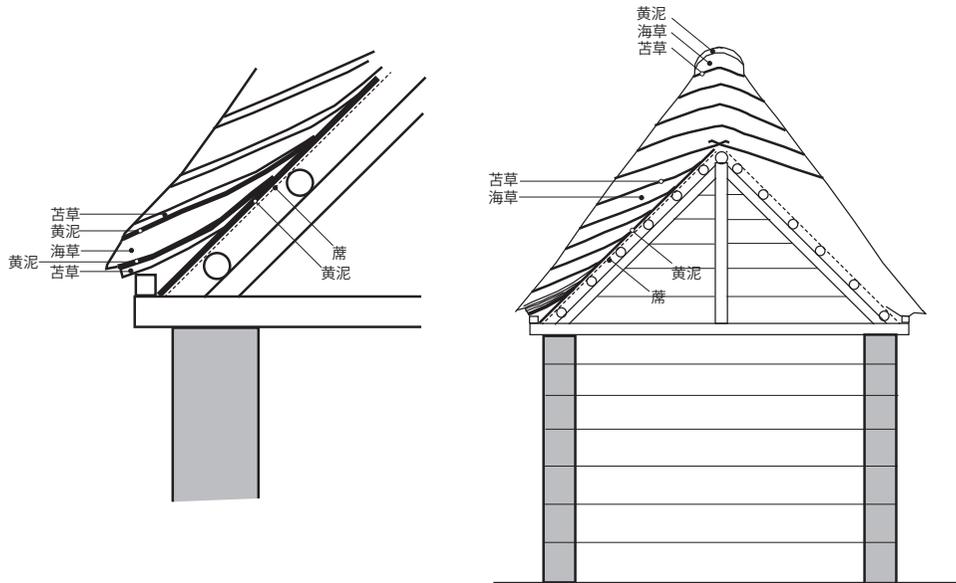


図5-1 海草屋根の模式断面図

## 2、仕事の手順

### (1) 材料の準備

依頼主は住宅を建てる前に材料を準備する。苫匠は自分の経験によって、依頼主が準備した材料で足りるかどうかを判断する。材料が足りなければ、不足の量を依頼主に教えて、準備させる。以前は漁村には農地が少ないので、麦藁を主に燃料として使用していた。従って海草が多い頃、漁村では屋根を全部海草で葺いていた。葺き方は麦藁を混ぜた時と同じで、苫匠にとっては難しい。海草がふわふわして柔らかいので、堅く締めにくいのである。農村では、海草は珍しかったので、海草の量は麦藁より少なかった。1970年代の海草が少なかった頃、農村では麦藁と茅だけで葺いた屋根が長持ちしなかった。海草屋根の寿命は100年以上である。細い「銅線草」を用い、技術が高い苫匠が葺いた海草屋根は50年葺き替えなくてもよい。現在、残っている海草屋根は大部分広葉草で葺いた。従って、30年経てば葺き替える必要がある。

一般的に、4間の住宅は8千斤～1万斤の海草と5千斤の麦藁が必要である(注3)。海草と麦藁の比率は2対1、3対1あるいは4対1である。この比率は依頼主が用意した材料によって苫匠が決める。海草屋に用いる麦藁や茅は軽く、海草は重い。海草が採れない地方は麦藁や茅の使用量が多く、臨海の漁村は海草の使用量が多い。苫匠は依頼主の準備した材料をみて、依頼主に相談して屋根の行数、厚さを決める。これは苫匠の技術が優れているかどうかの1つの基準である。

## (2) 海草を潤す

海草を潤すことは2つの目的がある。1つは海草の縮まりをよくするためで、よく縮まった屋根は風に対して強くなった。もう1つは海草が傾斜している屋根で滑らないようにするためである。したがって、潤した海草の湿度が大切である。湿度が低いとよく縮まらず、屋根から滑り落ちる。湿度が高いと、屋根の品質に影響がある。潤した海草は屋根でいつまでも乾燥せず、雨が降ったら、腐ってしまう。また、海草は均等に潤さなければ、葺いた屋根は凸凹になる。海草を潤すことは小工の仕事である。苦匠の手は湿度計のように、海草の湿度を測ることができる。一般的に、500斤の海草は70～80斤の水で潤す。

## (3) 海草を切り、束を縛り、黄泥を混ぜる

小工は潤した海草を切る。海草の長さは1m～1.5mぐらいあるので、屋根を葺く前に押し切りで60cm～100cmぐらい切る必要がある。海草に対しては麦藁、茅などは苦草と呼ばれる。苦草も押し切りで60cm～100cmぐらい切る。小工は切った海草と苦草を別々にまとめて、60cm角ぐらいの四角いものを作る（写真4-1、4-2）。これを一束と呼ぶ。一方で、小工は黄泥を混ぜる。



写真4-1 縛った海草束



写真4-2 縛った麦藁束

## (4) 足場を組む

安全のために、苦匠は自から足場をしっかり組む。自分の身長によって、足場の高さを決める。

## (5) 軒先を作る

すべて準備ができた後、屋根葺きが始まる。苦匠は軒先を作ることを「三層軒」の

作りと呼ぶ。軒先は屋根葺きの基礎である。特に軒先の厚さは屋根全体の厚さを決めることになる。鋼線海草は細く、厚いので、海草の中に一番腐乱しにくい種類である。軒先を葺くのは鋼線海草を使ったほうがよい。現在、鋼線海草はないので、軒先に瓦を使う住宅が多い。具体的な作り方法は以下のとおりである。

苫匠は足場を立て、蓆に黄泥を塗り被せる。小工はまず苫草束を苫匠に投げあげる。苫匠は苫草を蓆に並べていく。第一行苫草は軒先から30cm出す。第一行苫草の上に黄泥を塗り載せる。第二行は苫草の上に海草を載せる。第二行海草は第一行苫草から30cm出す。第二行海草の上に黄泥を塗り載せる。第三行は苫草を載せる。これで、軒先は出来上がる。

#### (6) 屋坂を葺く

勾配面である屋坂の面積は広く、傾斜度を保持する作業は大変な仕事である。苫匠は仲間と息を合わせて葺かなければならない。苫匠にとって、仲間は自分の妻のように重要であるという。

葺き方は下層に苫草を葺き、上層に海草を葺く。一番下の層の厚さは20cmぐらいで、だんだんに厚くし、一番上の棟の高さでは1mになる。第1層の苫草は1mぐらいの長さで、次からは60cm角の海草束を重ねる。苫草を置いて、海草を重ね、次に苫草というように交互に重ねながら葺き上げていく。一番下の3行に黄泥を使う。第四行から黄泥を使わない。しかし、屋根を葺く時、風を防ぐために、海草屋根の行ごとに両端に黄泥を載せ、行の中間部には載せない。海草を堅く締め、行ごとの厚さに、むらがないように葺くことが海草屋根の寿命を長くすることにつながる。

傾斜度を保持するために、使う苫草と海草量はだんだんに多くなる。毎行の海草も厚くなる。苫匠は2～3行葺いた後、足場を下りて、傾斜度を検査する必要がある。海草行ごとに手で表面の海草を取り、厚さのむらがないようにする。1960年代以前、棟までの苫草層と海草層に草針を使い、麻縄で草と蓆を縛った。1960年代以降、草と蓆を縛らない。1960年以降、なぜ草針を使わなくなったかは未調査である。

#### (7) 棟を仕上げる

棟までの屋根葺きは屋坂の部分の続きである。この上から、棟を葺く作業に入る。一般に、棟はよく風が当たるので、棟を葺く作業は大事な仕事である。堅固で雨漏りがしない、美しい屋根は棟にあらわれる。

仲間の中で技術が一番良い苫匠が棟を葺く。苫匠は棟に乗り、一層苫草と一層海草で葺き上げる。両面の草はきちんと交差させる。中心部には堅く葺かなければなら

い。棟の高さは1 m～2 mぐらいである。最後に、棟の海草の上に黄泥を塗り付ける。海草と黄泥は粘着し、風雨を防ぐ役割を果たす。1980年代以降、セメントと瓦を棟に載せることが多くなったが、これは良くない。セメントを載せれば、よく裂け目ができるからである。

最後に苫匠は、拍板で叩きながら、落ちた海草を取り、熊手でととのえる。箒で屋根の表面に残る草を掃き、屋根をきれいにする。

葺いた屋根は2年目に結果がわかる。堅く締まっていない所は窪む。この窪んだ所に雨水がたまるので、よく腐る。葺いた海草の棟の高さは5～6尺あるが、長年風雨にさらされた後、棟の高さも低くなる。20年経つと、棟の高さは4尺ぐらいになる。



写真4-3 棟を仕上げる



写真4-4 屋根の葺き替え

## (8) 葺き替え

葺き替えは主に棟を修理する仕事である。棟に載せてある海草と麦藁を取る。新しい麦藁と海草を載せる。棟を修理した後、屋根の壊れた所を探して、挿板で海草層をあげて、古い海草を取り出し、新しい海草を葺く。葺き替える時に、3本～5本の挿板が必要である。長い挿板は斜めに差し込む。短い挿板はまっすぐ海草層あるいは苔草層に挿し込む。短い挿板の上に、2本或いは4本挿板を差し込む。

## 第六章 職人の技術と仕事

### 1、調査対象の職人

2012年9月20日～9月29日の間、威海市の寧津所鎮において、海草屋根の職人に聞き取り調査を実施した。海草屋根葺きの職人は苔匠と呼ぶ。苔匠は農民で農閑期に副業として屋根葺きの仕事をしている。調査対象の年齢は55歳から83歳である。筆者が調査した所には現在、55歳以下の苔匠はいないということであった。屋根葺きの技術を学ぶ若者がいないので、屋根葺きの技術は継承できない状況である。調査の内容は生業と屋根葺き仕事、技術習得、仕事の範囲、職人組織の構成である。また、村の相互扶助を調査した。表6-1は調査した苔匠のプロフィールである。

表6-1 調査対象の職人

名前	生年月日	住所	師匠の名前	師匠の住所	師匠の関係
王秉伝	1938年8月20日	寧津所鎮寧津所村	李文忠	寧津所鎮寧津所村	師弟
畢可章	1932年9月14日	寧津所鎮小岔口村	李天志	斥山鎮溝李家村	師弟
畢可新	1940年12月22日	寧津所鎮小岔口村	李天明	斥山鎮溝李家村	師弟
劉家珍	1947年5月17日	寧津所鎮東墩村	蔣学来	斥山鎮溝姜村	師弟
張本順	1940年5月25日	寧津所鎮橋上村	李天華	斥山鎮溝家李村	師弟
程義東	1929年9月18日	寧津所鎮劉村	王徳	寧津所鎮旁村	師弟
程洛民	1956年11月22日	寧津所鎮劉村	程義東	寧津所鎮劉村	父子関係
程配賢	1949年3月4日	寧津所鎮劉村	程広礼	寧津所鎮劉村	師弟
程配新	1955年3月16日	寧津所鎮劉村	程配賢	寧津所鎮劉村	兄弟関係
曲栄国	1945年1月4日	栄成市港西鎮巍巍村	曲紹本	港西鎮巍巍村	父子関係

### 2、生業と屋根葺き仕事

威海市の村は漁村と農村に分けられる。漁村の人々は半漁半農で、女性は農業に従

事し、男性は漁業に従事している。従って、漁村には屋根葺き職人がいない。農村の人々は主に農業に従事している。冬小麦、大豆、薩摩芋、ピーナツ、トウモロコシなどを栽培し、豚、鶏などを飼っている。従って、農民は余業として大工、左官、石工、苫匠などの技術をもっている。筆者が調査した10人も全員農民である。

調査した苫匠10人の内、今も屋根葺きの仕事をしているのは7人である。そのうち6人は1960年代～1970年代から、屋根葺きの仕事を始め、残る1人は1996年から始めた。人民公社時代は屋根葺きの仕事の繁栄期であった。1980年以降、新しい海草屋を建てることが少なくなったので、苫匠の仕事もなくなった。多くの苫匠は別の仕事に変わった。人民公社時代、農民は生産隊から分配されたものだけでは生活が困難であった。それで、農民は家計の足しにするために、農閑期に出稼ぎをした。人民公社に「五大匠」という組織ができた。「五大匠」とは農村の瓦匠 (wa jiang 左官)、木匠 (mu jiang 大工)、苫匠 (shan jiang)、石匠 (shijiang 石工)、鉄匠 (tie jiang 鍛冶屋) である。職人は人民公社に登録し、職人の証明書をもった後、農業以外の仕事をする資格を得る。苫匠の仕事は危険をとまなうため、左官と大工より給料が少し高い。人民公社の時代は、農業生産は工分制度が行われていた。普通の男性の農民は1日労働したら、10分を得る。この10分は1元ぐらいである。苫匠は海草屋根を葺く仕事で日給は1.3～1.8元をもらえた。しかし、人民公社の仕事の代わりに、人民公社に1.1元～1.3元を引き渡さなければならない。それでも、苫匠は生産隊の労働より、1日当たり、0.2～0.5元多かった。苫匠の給料は技術を学ぶ期間も師匠と同じであった。その原因は人民公社時代、平等の観念が強く、徒弟を搾取することが許されなかったからである。しかし、日給の内の0.1元ぐらいを師匠に渡していたこともあった。

漁村には農地が少ないので、以前は、麦藁を主に燃料として使用していた。従って海草が多い頃、漁村では屋根を全部海草で葺いていた。葺き方は麦藁を混ぜた時と同じで、苫匠にとって難しい。海草がふわふわして柔らかいので、強く締めにくいのである。1970年代、海草が少ない頃、農村では麦藁と茅で屋根を葺いたと語る職人もいる。

1980年代以降、瓦屋根が増えて、新しい海草屋根を葺くことは少なくなった。現在の仕事は主に葺き替えである。新しい海草がないので、古い海草屋根を取り壊したものを利用して。取り壊したい海草屋根の家主と葺き替えをしたい家主は職人に連絡をする。現在、苫匠は海草の売買の仲介もしているのである。1980年代は苫匠の日給は1.8から2.2元であった。現在は苫匠の日給は200元ぐらいである。現在、寧津所鎮には海草屋がたくさんあるので、葺き替えの仕事がまだある。そのため、この地方に苫匠が一番多くいる。他の地方は海草屋根を修理する時、寧津所鎮の苫匠を頼むことが多い。

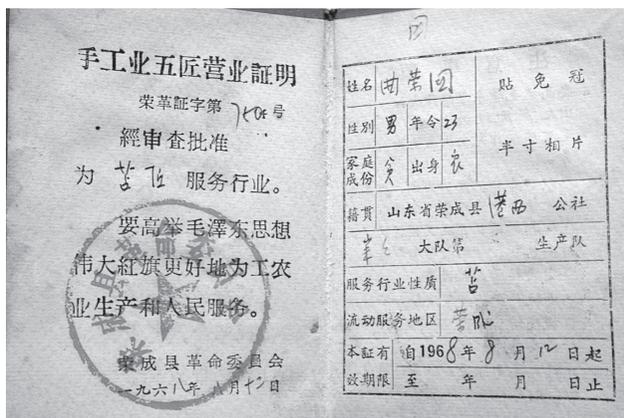


写真6-1 苦匠の営業証明書

2000年以降、山東省を中心とした観光地では海草屋を建てることは盛んである。苦匠は観光地で屋根葺きをする。例えば、曲荣国は2010年10月、職人6人と共に5000斤の海草を持って行き上海市の公園に海草房を作った。2008年には、畢可章は海草屋根のホテルを建てるために、3人の職人と一緒に済南市に行った。

### 3、職人の技術習得の方法

職人の技術習得の方法は師匠について、弟子として働きながら技術を修得するである。苦匠になりたい人は技術の良い職人を探し、弟子入りする。従って、技術が良い苦匠は20人~30人の弟子がいる。1949年以前、弟子入りする儀式が行われた。1949年以降、弟子入りする儀式が行われなくなった。弟子は自分の師匠を尊敬する。「1日師になると、一生の父になる」という諺がある。師匠は弟子に生活の手段を教えるために、自分の父と同じ地位がある。弟子は毎年の春節と仲秋に酒、煙草、菓子などを持って師匠を訪ねなければならない。一般的に、弟子が一人前の職人になるまで、師匠は新しい弟子をとれない。師匠は仕事がある時、自分の弟子を連れて、一緒に屋根葺きの仕事をしながら、弟子に技術を教える。1949年以前、弟子は日給の7割だけを

もらい、3割は師匠に渡した。1949年以降、師匠に日給を渡すことがなくなった。2年～3年ぐらいで、弟子は一人前の職人になった。

一般的に、苦匠になりたい人は他人の紹介を通して、弟子入りする。苦匠の王秉伝は1963年25歳の時、父の友人の紹介で、苦匠の李文忠に弟子入りした。以来、39年間ずっと海草屋根の仕事をしている。王秉伝の弟の王秉修（1953年生まれ）は王秉伝の紹介で、同じ師匠に弟子入りした。畢可章の師匠は斥山鎮溝李家村の苦匠李天志という人であった。当時、李天志はよく小岔口村で屋根を葺いた。当時の農村では誰かが住宅を建てる時、近隣、親戚は時間があれば、必ず手伝うという風習があった。手伝いの小工として畢可章は半年の間、李天志と一緒に5回仕事をした。畢可章は1963年に自分の弟畢可新を自分と一緒に屋根を葺く職人周徳路に紹介した。畢可新は周徳路に弟子入りし、2年後、一人前の職人になった。劉家珍は1969年に親戚からの紹介で、斥山鎮溝姜村の蔣学来に弟子入りし、3年後に一人前の職人になった。弟子入りした当初は、海草と麦藁を縛る仕事をした。厚さ10cm、長さ60cmに海草の束を縛るのである。そしてだんだん厚くして60cmまでにした。この海草を縛ることがきちんとできるようになってから、師匠は劉家珍に葺き方を教えた。

一方、自分の父親から技術を学ぶこともある。曲栄国は16歳から父親から海草屋根葺きの技術を学んだ。彼の父曲紹本は1895年生まれで、この周囲では有名な苦匠である。1960年代まで苦匠の仕事をしていた。程義東と程洛民も父子の関係である。程洛民は20歳で高校を卒業した後、父から屋根葺きの技術を学んだ。父の程義東は33歳の時に労村の王徳に弟子入りした。王徳は程義東の兄の程少分の師匠でもあった。程義東の師匠はとても厳しく、仕事も危険で大変なので、弟子入りして3カ月後、程義東はこの仕事をやめたいと考えたが、結局やめず、3年後に一人前の職人になった。師匠が厳しく教えたので、彼の技術はずばぬけていると程洛民は誇っている。同じ時間働けば、彼は2人分の仕事が出来るという。

また、兄弟から技術を学ぶこともある。程配賢と程配新は兄弟である。兄の程配賢は1971年に苦匠の程広礼に弟子入りし、3年後、一人前の職人になった。1985年頃から、新しい海草屋を建てることが少なくなったので、師匠の他の弟子は別の仕事に代わったが、彼は屋根葺きの仕事を続けている。弟の程配新は以前瓦匠をしていたが、1996年から兄について海草屋根の技術を学んだ。

#### 4、仕事の組織と範囲

苦匠の職人集団は師弟の関係によって形成される。1つの集団の人数は4人～30人である。普通、2人～3人の苦匠と一緒に屋根を葺くと、4間の屋根は8～9日ぐら

いで終わる。海草屋が盛んに建てられていた頃、海草屋根を葺きたい人は師匠に連絡をした。師匠は自分の弟子を3、4人組にし、仕事を配った。師匠は自分で仕事もしたが、弟子の仕事を監督する責任がある。

有名な師匠を中心として、20人以上の職人組織を形成することもある。このような組織の仕事範囲は広い。曲紹本は有名な苦匠で、彼に技術を学んだ人は多い。曲紹本には巍巍村の弟子が10人あり、ほかの村に弟子が20人ぐらいいた。以前、巍巍村は「苦匠村」と呼ばれていた。農閑期に弟子を連れ、一緒に海草屋を作る村へ出稼ぎに行った。仕事に出る単位は師匠曲紹本に10人から30人程度の弟子が付いて組と呼び、この組単位で威海市の成山頭、鷄鳴島、大漁島また煙台市にも仕事に出かけた。斥山鎮溝姜村の李天明、李天華と李天志3兄弟を中心とした苦匠組織は有名である。李天華と李天志には17人の弟子がおり、李天明には30人いた。寧津所鎮の多くの苦匠はこの3人から技術を学んだ。李天明はこの苦匠の職人の頭である。3人は莫耶島鎮、石島鎮、斥山鎮、東山鎮、上庄鎮などに弟子がいた。自分の弟子の村に仕事があれば、必ず李天明に連絡する。それから、李天明は弟子を派遣した。海草屋根葺きの仕事は榮成市南部を中心にしており、徒歩か、自転車で行ける範囲であった。

普通の職人組織は10人以下で形成される。このような中組織は師匠の村の周囲を中心として、屋根葺きをしていた。屋根を葺いてもらう人は技術の良い職人に頼む。仕事を引き受けた師匠はまず自分の弟子に仕事を分配する。自分の弟子で足りなければ、別の苦匠に頼むというように師匠同士は相互に仕事を紹介しあっていた。苦匠張本順は師匠と一緒に寧津所鎮以外に、自転車で乗って、20km離れた他の鎮で屋根を葺くことがあった。その時は、遠いので、建主の庭や小屋あるいは近所の家に泊まり、建主が3食出してくれたこともあった。近年、遠い榮成市の周囲の村へはバスで通ったこともある。苦匠王秉伝は師匠・兄弟弟子と一緒に周囲の莫耶島鎮、石島鎮、斥山鎮、東山鎮、上庄鎮などの村で仕事をしたことがある。以前は自転車がなく、歩いたので、30km以上離れた村へ行った時は、8時に仕事を始めるために、朝3、4時ぐらいに起きなければならなかった。夜は海草屋根を葺く家に泊まった。羊小屋に泊まったこともある。

家族、親戚、あるいは仲間の関係によって、形成したもっと小さい4人くらいの組織がある。苦匠は師匠から技術を学んだ後、師匠の組織を離脱し、自分の家族と一緒に屋根葺きをする。一方、師匠は自分の息子、親戚に技術を教えて、また組織を形成する。苦匠劉家珍は一人前の職人になった5年後、自分の兄弟、妻の弟、同じ村の苦匠と一緒に屋根を葺いている。仕事の範囲は20km以内で日帰りできる距離である。遠い場所へはバスで行き、屋根を葺く家に泊まる。2006年には済南市、文登市、威海市

へ行き、公園やホテルの海草屋根を葺いた。他の地方へ行けば、給金は高くなる。現在、近い所では180~200元の日給をもらい、他の市へ行けば、300元の給料がもらえる。以前、寧津所鎮の劉村は「苫匠村」と呼ばれた。この村に30人の苫匠がいたが、今も屋根葺きをしている苫匠は2人だけである。この村では、家族関係で作った職人組織が多い。例えば、苫匠程義東は兄、息子と甥たちと一諸に海草屋根を葺いていた。

職人組織は1980年から次第に解散した。1980年代以降、新しい海草屋根を葺くことは少なくなった。多くの苫匠は他の仕事を探し、屋根葺きの仕事をやめた。若者も屋根葺きの技術を学ばない。従って、近年は住民が屋根を葺き替える時に、苫匠を探すのが困難になった。現在、寧津所鎮には海草屋がたくさんあるので、葺き替えの仕事がまだある。そのため、この地方の苫匠が一番多くいる。他の地方は海草屋根を修理する時、寧津所鎮の苫匠を頼むことが多い。

## 5、村の相互扶助

### (1) 栄成市の農業生産における相互扶助

『栄成民俗』によると、栄成市の農業生産における相互扶助にはユイとテツダイの2つ方式がある（栄成市民俗協会、栄成市新聞社、1997）。中国語では相互協力と手伝いと呼ばれる。人民公社以前、栄成市の農村では家庭単位で農業生産をした。血縁関係で形成したユイの相互扶助慣行があるが、同じ親族と近隣による無償のテツダイもあった。

農業生産の中で共同作業の仲間を形成した。この共同作業団は兄弟あるいは親戚という血縁で形成されたものである。1958年以前、トラクターなどの機械がない時代では、馬、牛などの家畜は農業に不可欠なものである。一般的に、一戸の農家は1頭の牛を飼っていた。耕作する時、1つの犁には2頭の牛が必要である。それで、2戸の牛を飼う兄弟と2、3戸の牛がない兄弟あるいは親戚が協力し合った。一般的に家畜を飼う家は家畜がない家より耕地が多い。このようにして、家畜がない困難と労力の不足を解決した。

テツダイは予約はせず、誰かの家が忙しい時に、村の近隣や親戚や友人が必ず手伝う。一般的に、テツダイは人々が積極的に自分から進んですることである。そのため、この手伝いは無償で労働交換しなくても良い。老人への手伝いは親族の中で、耕地はあるが、労力がない老人の手伝いである。労働能力がなく身寄りのない老人はこの手伝いの対象である。耕作期間中、親族の年輩で徳望のある人が誰の家畜を使用するか、誰が耕作するかを指定した。畑の日常管理は老人が自分でする。

## (2) 村の相互扶助の内容

### A、海草の採集、運搬の相互扶助

以前は、農家にとって、海草屋を建てることは大きな事業であった。農家は海草屋を建てる何年も前から石、海草などの材料を用意する必要があった。これらを用意する時、親戚、近隣は必ず相互に手伝った。たとえば、荷車、ロバ、ラバ、馬、牛などの運送具・家畜を借りるなどである。また、運搬する時に、親しくしている親戚、近隣に知らせ、必ず手伝ってもらう。巍巍村の曲栄湘は海草屋を1975年に建てた。この時は人民公社時代であったので、運送具は人民公社から借りた。成山頭から2万斤の海草を買った。成山頭から巍巍村までの距離は20kmぐらいあるため、自分の家族だけで海草を運搬するのは困難である。それで、親しい近隣、親戚に知らせ、一緒に運搬した。

寧津所鎮では、海草を主に林家流村、馬家砦村、東褚島村などの村人が採集した。例えば蘆家村からこれらの村までの距離は15km以上あるため、海草の運搬は大変な作業である。トラックがない時代、海草を運搬するには荷車、ロバ、ラバ、馬などが必要であった。干した海草を早く家に運搬したほうが良いので、運搬する人数は多ければ多いほどよい。親戚、近隣に知らせておけば、彼らは荷車、天秤棒、縄などの道具を持って、一緒に運搬した。親戚、近隣に手間賃は払わない。他人のロバ、ラバ、馬などを使用すれば、2斤の大豆飼料を渡した。

馬家砦村は海草の採集地であり、以前は自由に採集できた。秋になると、成長した海草は波によって切られ、水面に浮かぶ。北からの風によって海岸に流れつく。それを熊手で引き上げる。フォークを引き上げた海草に差し込んで、海岸の砂浜まで運搬する。海草を採集する仕事は北風が吹く日に行われる。海草屋を建てたい農家は北風が吹いた日には必ず海草を採る。時間のある近隣、親戚がそれを見たら、必ずフォークと熊手を持って積極的に手伝う。日常生活でよく他人を手伝う人は用事ができた時、多くの人に手伝ってもらうことができる。

### B、物、金銭面の相互扶助

村民の相互扶助は人力だけではなく、金銭、物の手段でも行う。親戚の間で金を借りることも行われる。近い親戚が貧しく、金を借りることができない時、村の裕福な近隣に借りることもあった。一般的に、この金は利息が要らず、元金だけを返す。物の相互扶助は主に道具、運搬用の家畜、食べ物などである。農民の生活が貧しかった時代は、饅頭、白米、肉などは珍しい食べ物であった。それで、住宅を建てる時は、職人、小工を招待するため、食糧を蓄えることが必要であった。父母、兄弟、姉妹など近い親戚は必ず食糧をくれた。親戚、近隣はよく食糧、野菜、酒、煙草、菓子、肉、

魚を持って行く。これは祝いと手伝いの2つの意味がある。

東楮島村は180戸の村落であり、畢、蘆、王などの姓の住民が多い。昔、1つの親族が集まって村落を形成した。この村落では異なる名字があるが、祖先は関係が密であった。従って、村には昔から相互扶助の慣行があった。東楮島村は昔から農耕地が少なく、村民は主に漁業に従事している。女性は家で農業をし、男性は海で漁業をする。男性は海に出たら、10日から1か月ぐらい帰らない。海に出ていない男性は海に出た家を手伝う慣行がある。旧暦5月6日からの休漁期間になると、男性は家に帰り、住宅を建てたり、屋根を葺き替えたりする。住宅を建てる時に、近隣、親戚、漁業仲間には必ず手伝う。金は関係が近い者同士や親戚から借りる。以前自分が住宅を建てた時にもらった物に従って、近隣には少し多目にお返しをする。親戚は作った饅頭、餅を籠に入れて贈り、海に出た人は必ずよい魚を贈る。

### C、小工としての手伝い

海草屋を建てる時、瓦匠、木匠、苫匠だけに給料を払った。職人を手伝う小工は建主の家族、親戚、近隣で構成する。一般的に、住宅を建てる前に、親しい近隣、関係が近い親戚に手伝いを頼む。以前、自分が手伝ったことのある家は必ず積極的に手伝ってくれる。曲栄湘が海草屋を建てる期間、毎日小工が5～6人いた。近隣、親戚は都合のつく日を曲栄湘に知らせた。曲栄湘は必要な人数によって近隣、親戚で組をつくった。屋根葺きの時、小工は主に足場を組み、海草の束を縛り、黄泥を混ぜ、材料を運送した。蘆家村の蘆炳新は16歳ぐらいから小工として近隣、親戚を手伝った。一般的に、冬に海草を用意して、翌年の3、4月に新しい住宅を建てる。葺き替えも農閑期に行われた。農閑期は職人に時間があり、手伝いの小工も暇があるからである。人付き合いが良い人は住宅を建てる時にもらう手伝いが多い。東楮島村の王法芝は20代の頃、毎年小工として他人を手伝った。主に足場を組み、海草の束を縛り、それを屋根へ投げ上げ、泥を混ぜた。人民公社時代は職人だけに食事を提供した。手伝いの小工には食事を出さなかった。

### D、人民公社時代の相互扶助

1958年から1980年までの人民公社時代、馬家砦村では海草を自由に取ることができなかった。馬家砦村は村で海草を採集して、村民の申請によって分配した。残った海草は販売し、村の収入になった。従って、海草の採集の手伝いがなくなった。海草屋を建てる時、依頼主は職人を雇った。村は手伝いの小工を派遣した。村は依頼主が食事を提供しないことを規定し、村の食堂で全員が食事をした。小工の労働に対しては村から工分をもらうことができた。人民公社時代の手伝いは村によって調整されたのである。

## E、相互扶助の消滅

海草屋を建てるには多大な労力、建築材料、資金を必要とした。村民の間に相互扶助の慣行があった。親戚、近隣間で海草の採集、運搬を相互に手伝った。また、金、道具、家畜の貸し借りをした。住宅を建てる時に、食べ物を贈ることもしていた。小工としての手伝いは普通の労力の相互扶助である。人民公社時代は、村単位で相互扶助を行っていたこともある。

1980年代以降、海草屋を建てることが少なくなった。経済の発展に伴って、物を贈るという相互扶助もなくなった。1990年代以降、建築会社が住宅の建築を請け負う。若者はマンションを買うようになった。従って、以前の農村に存在していた相互扶助はなくなった。中国の改革開放の政策と共に人びとは裕福になり、忙しくなった。互いの生活の手伝いも少なくなった。1980年代には村民の相互扶助があったが、1990年代になると、小工も雇用された。現在、人びとは住宅を買い、自分で建てることは少なくなってきた。伝統的な相互扶助はだんだんなくなった。

## 第七章 職人道具の技術伝承

### 1、道具の種類、形、機能

(1) 曲栄国の道具（1945年1月4日生まれ、栄成市港西鎮巍巍村、図7-1、7-2、7-3、7-4、写真7-1、7-2）

曲栄国の道具は全部自製のものである。職人の道具は抹刀、挿板、拍板3種類がある。抹刀は黄泥を塗る道具である。挿板は修理のときに海草に差し込んで、挿しあげ、その隙に新しい草を挿し込む。拍板は葺き上げていく際に叩きながら傾斜をそろえる道具である。拍板の持ち手部分に挿板を挿し込んで長柄として高いところを叩く。挿板と拍板は道具ひとそろいである。特に、挿板の先を拍板の取手部分に差し込んで一体化した叩き道具として使う。拍板は柳の木で作られる。一枚の板あるいは2、3枚の

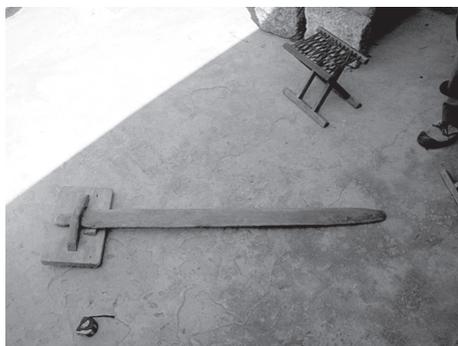


写真7-1 曲栄国所有の挿板と拍板



写真7-2 曲栄国所有の拍板と抹刀

板をはぎ合わせて作られることもある。拍板の裏には溝を刻む。挿板は定まった寸法はない。挿板の長さは材料の長さで使いやすい全体形状で決まる。材質は堅いハリエンジュの木である。道具の作り方は自分の親方から学んだ。抹刀は瓦匠の道具で、商店から買った。道具に関する伝説は聞いたことがないと曲氏は語る。

(2) 王秉伝所有の道具 (1938年8月20日生、栄成市寧津所鎮寧津所村、図7-5、写真7-3)

王秉伝によると、苫匠の特有の道具は拍板、挿板と草針がある。草針はアサ縄を用いて棟の海草を縛る道具である。1960年代以降、この道具を使わなかった。王秉伝の師匠は以前、専門鋏を使っていたという。拍板は柳の木で作られ、新しい海草屋を作る時に使われる道具である。挿板はハリエンジュの木で作られ、海草屋根を葺き替える時に用いられる道具である。挿板と拍板は苫匠の特有の道具である。一般的に、自分の道具は自分で作る。木匠に頼んで、道具を作ることもある。王秉伝の道具は全部自分で作った。挿板の長さは1.5m～2.0mぐらいでこのような長さが使いやすいという。一般的に、苫匠は2～3本の挿板を持っている。普通の屋根を葺きに行くと、2本の挿板と1の拍板を持つ。長い挿板は天秤棒としても使う。



写真7-3 王秉伝所有の挿板

(3) 畢可新の道具 (1940年12月22日出生、寧津所鎮小岔口村、図7-6)

苫匠の道具は自分で作ることができる。栄成市の南部では、苫匠の道具は「翻天印」と「殺竜剣」と呼ばれる。栄成市の北部の職人は拍板と挿板と呼ぶ。大工の鑿、鋸、鉋などの道具を借り、自分で挿板と拍板を作る。鋸で木を切る。鑿で拍板の裏に溝を刻む。鉋をかけて拍板を滑らかにする。柳の木は裂けにくい特徴を持っているので、拍板を作る最高の材料である。ハリエンジュの木は堅いので、常にこの材料で挿板を作る。挿板の長さは150cmぐらいである。

(4) 劉家珍の道具 (1947年5月17日生まれ、寧津所鎮東墩村、図7-7)

劉家珍によると、普通、苫匠の仕事は2本の挿板、1つの拍板と1本の抹刀で足りると語る。屋根葺きは2人でするので、挿板は4本必要である。もし挿板が足りなかったら挿棒を使う。草針という道具は聞いたことがないという。挿板と拍板を作る材料はハリエンジュと柳の木である。この2種類の木は身近なもので調達しやすい。家具や農具を作るために、村民は住宅の近隣、村周囲の山にこの2種類の木を植える。劉家珍は弟子入りの最初に師匠の道具を使った。個人所有の最初の道具は木匠に頼んで作ってもらった。現在所有の道具は全部自作である。拍板の裏には溝を刻むが、この溝は屋根を梳く役割を持っている。

(5) 張本順の道具 (1940年5月25日に生まれ、寧津所鎮橋上村、図7-8)

普通、苫匠は3本の挿板、1つの拍板と抹刀を必ず備えなければならない。挿板はハリエンジュの枝で作られる。挿板の長さは枝の長さによって決まる。作った挿板は自分の使い易さの好みによって選択する。張本順は7本の挿板が所有している。この中で左から1番と5番の挿板をよく使用する(図7-8)。

F、程洛民の道具 (1956年11月22日に生まれ、寧津所鎮の劉村、図7-9)

苫匠の道具は他の職人の道具より数も少なく簡素であると語る。ハリエンジュの枝と柳の板で作る。他の職人の道具は購入するが、苫匠の道具は多くを自分で作る。抹刀は瓦匠の道具で、以前、鍛冶屋から買った。挿板を屋根に挿し込む際、とても長い挿板は邪魔になり、とても短い挿板は挿し込むことできない。拍板は屋根を叩き、きれいに梳く役割を持っている。屋根を叩けば、屋根が堅固になる。屋根の表面に残った海草を整理するために、拍板で屋根の上から梳く。

(6) 程配賢、程配新の道具 (程配賢 1949年3月4日生まれ、程配新 1955年3月16日に生まれ、寧津所鎮の劉村、図7-10)

苫匠の道具は簡単であり、誰でも作ることができる。道具には決まった寸法がない。程配賢は最初、自分の師匠の道具の形によって、自分で1つの拍板と3本挿板を作った。屋根を修理する時に、屋根を挿し上げるために、3本の挿板が必要である。ちょっと長い挿板は斜めに挿し込む。短い挿板はまっすぐに挿し込む。挿板の長さは苫匠によって違う。これは自分の習慣によって決める。

## 2、苫匠道具の特性

調査を通して、苫匠の道具の種類を知ることができた。苫匠が今も使用している道具は抹刀、挿板、拍板の3種類である。抹刀は瓦匠も使うが、挿板と拍板は苫匠の特有の道具であり、自ら制作した。以前は草針と鉋を使っていたことが明らかで、麦藁

や茅の屋根葺き技術が基本になると考えられるが、現在は使用方法等も含め技術は伝承されていない。抹刀は黄泥を塗る道具である。拍板は柳の木で職人自身が作り、挿板もハリエンジュの木で職人自身が作る。苫匠は何本もの異なる長さの挿板を持っている。挿板は修理のときに海草に差し込んで、挿しあげ、その隙間に新しい海草を挿し込むのに用いる。葺き替えには普通3本から5本挿板が用いられる。拍板は葺き上げていく際に叩きながら傾斜をそろえる道具である。拍板の持ち手部分に挿板を挿し込んで長柄として高いところを叩くような使い方もする。

以下は職人の所有する挿板すべてを図化したものである。

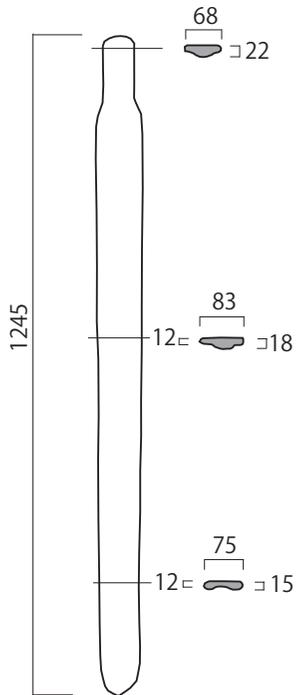


図 7-1 曲楽国の挿板

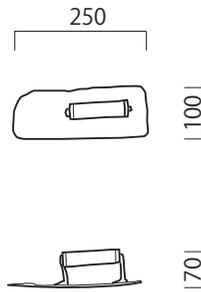


図 7-2 曲楽国の抹刀

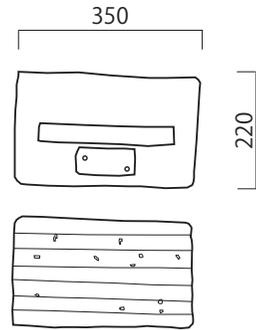


図 7-3 曲楽国の拍板

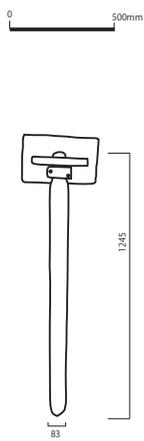


図 7-4 曲楽国の挿板と拍板

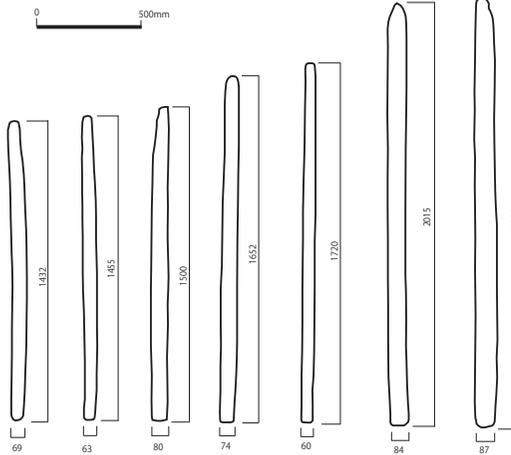


図 7-5 王乗伝の挿板



図7-6 畢可新の挿板

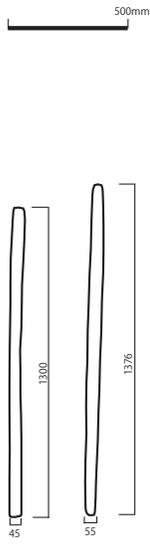


図7-7 劉家珍の挿板

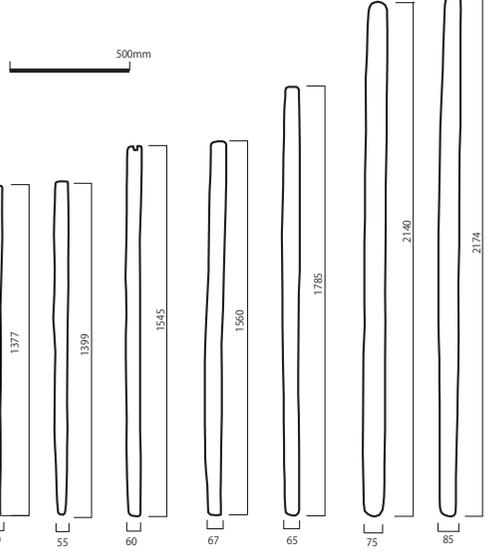


図7-8 張本順の挿板

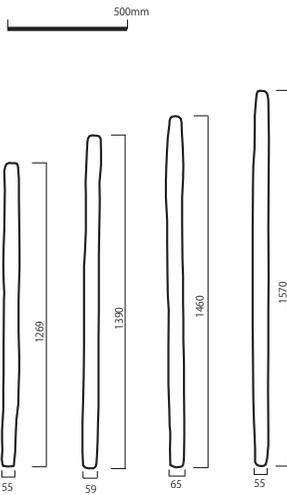


図7-9 程洛民の挿板

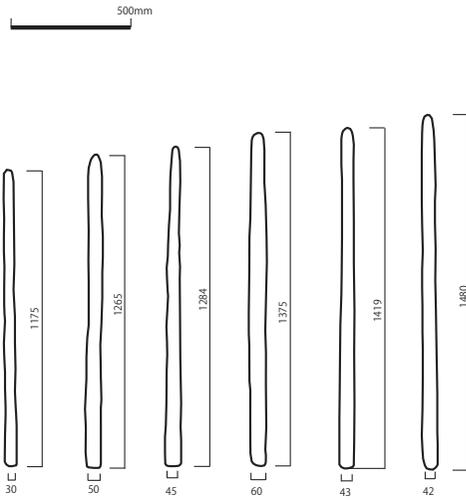


図7-10 程配賢、程配新の挿板

表7-1、7-2、7-3は職人所有の道具の寸法をまとめたものである。拍板は自製であり、一人あたり1個から3個の所有で、持ち手のつく形であること及び寸法もほぼ同じである。抹刀は既製品を買って使うため一人1個で、形寸法もほぼ同じである。これに対して挿板は職人によって所有数が大きく異なる。また長さに様々なものがある。これはこの挿板が職人の仕事を代表するものとしてあり、使いやすい長さ、幅、厚さを工夫して自製したことを物語るものである。また、職人の仕事を高貴なものとする伝承が作られ、道具に神秘的な力が与えられる伝承が作られ、それらの意味を具体的に示す道具としてこの挿板があったことをうかがわせる。そのことは長い挿板が天秤棒の代わりに使われ、日常の運搬や屋根葺き仕事のための移動の際に、屋根葺き職人であることを示すサインであったことから推し量ることができる。

表7-1 職人所有の拍板寸法一覧

拍板	縦	横	厚さ	柄の長さ
曲栄国	35	22	3.5	25.5
王秉伝	35.7	23	4.3	18.5
	34.5	22.7	5.2	19
劉家珍	35.5	31.7	2.7	18.5
	32.8	20.9	2.3	21
張本順	37	24	3.8	24.5
	35.9	22.6	3.2	19.8
	32.1	18.2	2.5	18.3
程洛民	32.5	22	2.5	5.5
程配賢・程配新	33.1	24	4	16
	37.5	26.5	3	27.5

表7-2 職人所有の抹刀寸法一覧

抹刀	縦	横	高さ	柄の長さ
曲栄国	25.5	10	7	12
王秉伝	26.9	11.5	7	11.5
畢可新	27	10.9	7.3	11.3
劉家珍	25.5	10.5	6.8	12.5
張本順	26.8	13	6.5	12.4
程洛民	27.5	11	6.5	13.5
程配賢・程配新	26.5	9.5	7	12.5

表7-3 職人所有の挿板寸法一覧

挿板	長さ	幅	厚さ
王秉伝	124.5	8.3	1.8
	201.5	8.4	1.9
	205	8.7	4.5
	172	6	2.6
	165.2	7.4	2
	145.5	6.3	2.4
	143.2	6.9	3.1
	150	8	2.5
畢可新	139.1	6.9	3.5
	177	5.2	2.9
劉家珍	130	4.5	3
	137.6	5.5	3.2
張本順	217.4	8.5	4
	214	7.5	5.4
	178.5	6.5	3.2
	156	6.7	2.1
	134.5	6	2.5
	139.9	5.5	2.7
	137.7	6.9	2.9
程洛民	157	5.5	2.7
	146	6.5	2.8
	139	5.9	2.4
	126.9	5.5	3
程配賢・程配新	148	4.2	2.1
	141.9	4.3	2.6
	137.5	6	3.5
	128.4	4.5	2
	126.5	5	2.8
	117.5	3	3.1

## 2、道具にまつわる伝説

職人の用いる道具に違いはないが、その呼称は、栄成市の南部と北部では異なっている。北部の港西鎮と成山鎮では拍板、挿板と呼ぶ。南部の寧津所鎮では殺竜剣、翻天印と呼ぶ。南部の苦匠の道具には象徴的意味が伝承されているのである。北部では、このような伝承がない。南部と北部の伝承の違いの原因は未調査である。道具の名前に家を様々な災から守る意味をつけ、それに関する伝承がある。また、皇帝や軍神から道具を授かる伝承が伴い、職業を高貴なものとしている。

### A、家を守る屋根の伝説

農村では住宅を建てる前に大安吉日を調べて、その日にとりかからなければならない。瓦匠の仕事ははじめの日も必ず大安吉日である。木匠が棟上げをする日も大安吉日である。苦匠にとっては、この道具は魔よけの役割があるので、吉日を選択しなくてもよい。

苦匠程洛民によると、明朝を建てることになる趙匡胤は苦匠の道具に名前を付けた人だという。ある時、趙匡胤は戦争に破れ、負傷した趙匡胤は馬に乗って逃げ、その後ろを数人の敵兵が追いかけた。その時、仕事を終えて家に帰る苦匠に出会った。この苦匠は拳法ができたので、持っていた道具で敵兵を打ち負かし、趙匡胤を助けた。その後、趙匡胤は明朝を建国する。この苦匠に感謝するために、国中この苦匠に探したが、とうとう探し当てることができなかった。それで、趙匡胤は苦匠の道具に「殺竜剣」と「翻天印」という名前を与えた。

苦匠の道具は主に魔よけの役割があると苦匠程洛民は語る。蛇、サソリ、イタチなどがよく屋根に住んでいる。このような動物は化け物と考えられていた。この化け物たちは苦匠の道具を見ると、殺されないために素早く逃げると伝承されている。

苦匠張本順からは、また別の道具伝説を聞いた。「殺竜剣」と「翻天印」は昔の皇帝が名前を付けた。昔、ある皇帝が民情を視察するために、庶民の衣服を着て出かけた。途中、強盗に遭い、皇帝は村の方向へ逃げた。海草屋根を葺いていた苦匠は逃げていく皇帝を発見した。苦匠たちは自分の道具で、強盗を攻撃し、皇帝を救った。皇帝は朝廷に帰った後、苦匠に感謝するために、苦匠の道具に「殺竜剣」と「翻天印」という名前を与えた。皇帝が名前を付けたので、苦匠の道具は魔よけの役割がある。苦匠の地位は他の職人より高くなった。

中国では蛇を小竜と呼ぶ。蛇は神として家族を保護する役割をもっている。普通、蛇神は屋根に住んでいる。海草屋根を葺き替える時は人間が侵入するので蛇神の住宅に礼を失することになる。蛇神は怒りやすく、人間を攻める。この時「殺竜剣」を使うと、蛇神は人間を攻めることができない。これが「殺竜剣」の名前の由来である。

拍板は「翻天印」と呼ばれる。「翻天印」は天を覆す印鑑である。この「翻天印」は魔よけの役割をもっている。化け物はこの道具を使って作った海草屋根には行かれない。それで、苫匠はこの2つの宝で海草屋根を葺くのである。

苫匠は拍板を「翻天印」と呼ぶ。中国の民間信仰で地位が最上位の神である天帝はこの印章を人間に与えた。苫匠が屋根を葺くことは、天帝の印章を押すことであり、この住宅に住む人間は天帝が守り、平安な生活ができることを意味する。挿板は「殺竜剣」と呼ばれる。竜王は中国の民間信仰で風雨をもたらす神である。「殺竜剣」は竜を刺すことができる剣である。竜王はこの道具を怖れて、暴風雨を海草屋にもたらさない。

## B、職業神の伝説

苫匠畢可新は拍板を「翻天印」と呼び、挿板を「殺竜剣」と呼ぶ。この名前は呂尚によって付けられたという。呂尚は古代の周朝時代の軍師として世界の神と軍隊を統率して暴虐の殷朝を覆した人物である。周朝を確立した後、世界の仙界と人界が混乱したので、仙界と人界に分かれるために、「封神」を行った。「封神」とは人間を管理するために、神に職務を任せることである。呂尚は世界の神に職名、地位と職務を与えた。彼は全部の職務権限を神に配分したが、一部分の神は与えられた職務に不満足だったので、呂尚の正門に待って是非を判別したいとした。そして、呂尚は印と宝剣を持って屋根に登り、「太公はここにいる、諸神は回避なさい」と言った。諸神は呂尚の怒った様子を見ると、一目散に逃げた。この時、彼は自分に職務を付しなかったことに気付いた。そして、呂尚は屋根を葺く職務を自分に任せた。彼の身につける印章と宝剣は屋根を葺く道具となった。呂尚は苫匠の始祖になったのである。

## 第八章 結果と考察

### 1、自然環境と屋根

海草屋根は自然環境の影響を反映したものである。威海市は沿岸部の丘陵地帯である。人々は自然の植生と生業の中から入手しやすい材料を選択して海草屋根を作る。海の中では海草が自生しており、これを屋根葺き材料として活用した。丘陵・山地では成長している茅、農業生産の麦藁などの身近に入手しやすいものを利用して屋根を葺く。沿岸部の人々は海草の腐りにくいという特徴と茅、麦藁の堅いという特徴を結合して、屋根の下層を茅、麦藁で葺き、表面を海草で覆う。

漁村では海草を取りやすいので、海草の使用量が茅と麦藁より多い。農村では茅と麦藁が入手しやすいので、使用量は海草より多い。これは屋根材料が地理的影響によ

て異なることを示す。調査を通して、自然生態の変化は屋根に大きく影響していることが明らかとなった。海草の自然生態は1958年から海産品の養殖、工業の汚染によって破壊された。海草の量はだんだん減少してきた。一番腐乱しにくい鋼線草がないので、1960年代から広葉草で葺いた屋根が多くなった。農村では茅と麦藁だけで葺いた屋根も出現した。1980年代以降、海草は不足したので、新しい海草屋根を葺かなかった。今、住民は葺き替えるために、古い海草を使う。海草と麦藁を混ぜて、葺き替えることもある。

## 2、屋根葺きの技術と道具

職人は農業を主としその副業として、屋根葺きの仕事をしている。屋根葺きの技術は師弟制度によって伝承されてきた。苫匠の職人集団は師弟の関係によって形成される。師匠は仕事をしながら、弟子に技術を教える。一層の苫草を葺き、上に一層の海草を葺くのは海草屋根の特色である。屋根は2層の草層で構成されている。下層は苫草層で、骨組みの役割を果たす。上層は海草層で、防風雨の役割があり、海草屋根の名前の由来である。屋根葺きの前に、建築材料の使用量の予測、海草を潤すのは重要なことである。屋根葺きは軒先、屋根坂、棟の3部分を分けられる。軒先の作業では屋根の厚さが決まる。屋根坂の作業では傾斜度を保持し、むらがないように葺く。棟の作業では風雨を防ぐために、1m～2mの高さの棟を作る。

職人は道具の使い方を弟子に教える。苫匠の特有の道具は挿板と拍板である。挿板は針槐の木で作られ、修理のときに海草に差し込んで、挿しあげ、その隙間に新しい草を挿し込むのに用いる。拍板は柳の木で作られ、葺き上げていく際に叩きながら傾斜をそろえる道具である。

## 3、技術に関する伝説

栄成市南部での伝承によると、苫匠の道具の名前は聖人、英雄と関わりがある。古代の呂尚、皇帝、天帝などが道具に名前を付けたとされる。聖人や英雄が道具の名前を与えたため、道具が宝になった。そのため、職人は自分の道具に誇りを持っている。栄成市南部だけに伝承することの理由は未調査である。

また、道具は住宅の守り、魔よけの役割がある。殺竜剣は主に竜と蛇を殺すとされている。風雨を主管する神としての竜王は殺竜剣が怖いので、暴風雨で海草屋を襲わない。屋根に住んでいる蛇神は家族を保護している。しかし、海草屋根を葺き替えの時に、人間が自分の家を侵入するため、人間を責める。殺竜剣を使うと、蛇神は人間を責めることができない。屋根に住んでいる蛇、サソリ、イタチなどは化け物と考え

られていた。苫匠の道具は魔よけの役割があるので、化け物たちは屋根に道具があたると殺されないように素早く逃げると信じられている。

以上が調査の結果明らかとなった事柄である。自然生態との関係、基本的技術の道具の型、職能及び道具が持つ伝承と象徴的意味を具体的に明らかにすることが出来た。この中で屋根の葺き方に著しい特徴を見いだすことが出来た。苫草と海草及び黄泥を重ねることである。特に下地の蓆の上、さらに軒先の葺き始めの部分に層状に黄泥を塗ること、また、棟仕上げと屋根の妻面全体に黄泥を塗ることが明らかにされた。海岸から離れた内陸部での草屋根葺きの技術が未調査のため、推測の域を出ないが、泥を塗る技術は屋根作りの古い形を残しているのではないかと考えられる。オンドル設備とともに、北方の家作りの技術との関連で考える必要がある。

威海市の住民は海草の腐乱しにくいという特徴を利用して、海草屋を作る。職人が自分で作った道具で葺いた屋根は家を守る役割を果たす。海草屋を作る時に、村人の間に伝統的な相互扶助の関係を形成した。そして、中国山東省の沿岸部に特色的な民家を形成した。

海草屋は正面を海に向け、背面を北側の山に向ける位置に建てる。夏は涼しく冬は暖かいという特徴を持っている。しかし、海草屋根は今まさに滅びようとしている。海草屋の減少の原因は2つある。1つは中国の経済の発展とともに、都市化が進展して、農村の海草屋が現代建築に代わることである。若者は便利な生活を追求するため、海草屋に住むことを好まなくなった。もう1つは近年の工業汚染やエビ、魚、海苔の養殖をするために沿岸が活用され、海草が減少していることである。瓦の値段より、海草の値段の方が高く、古い海草屋根を葺き替える場合は海草の代わりに瓦を用いるようになった。苫匠も高齢化の原因でどんどん少なくなっている。

海草屋根を葺くという仕事の背景には、この屋根に対する観念、地域の人のつながり、自然のリズムに合わせた利用の仕方からなる暮らしの定型化したものがあったということを実証的に明らかにした。今後、海草屋根を維持するのは益々困難になるだろう。特徴的な居住性をもつ海草屋が中国山東省の沿岸部の象徴の一つとして後世にその生活技術を受け継いでいくことは中国の文化を守っていくことでもある。

## 謝辞

調査実施にあたっては海草屋根葺きの職人の方々に大変お世話になった。職人曲栄国、王秉伝、畢可新、劉家珍、張本順、程義東、程洛民、程配賢、程配新に心から感謝申し上げます。また、話者として取材に協力して下さった劉玉啓、袁毓品、劉本

学、蘆志新、劉学仕に心から感謝申し上げます。

参考文献：

- 李 文夫、『威海民居海草屋歴史文化研究』、威海市大衆新聞社、2004年
- 劉 志剛、『探訪中国稀世民居 海草屋』、海洋出版社、2008年
- 印南敏秀、『里海の生活誌 文化資源としての藻と松』、みずのわ出版、2011年
- 張 潤武・薛 立、膠東漁民民居、山東建築学院学報、2004年
- 郭 棟、「山東近岸海域海草種類の初歩調査研究」、海洋湖沼通報、2010年
- 威海市地方史誌研究所、『威海市史』、当代中国出版社、2010年
- 山東省地方史誌編纂委員会、『山東省志 民俗志』、山東省地方史誌編纂委員会、1996年
- 丘 桓興、『中国の民俗をたずねて』、中国広告社、1989年
- 周 洪才、「石島湾の海草屋」、山東省建築学報、1995年
- 陳 喆、「原生态建築—胶東海草調研」、『新建築』雑誌、2002年
- 孫 大章、『中国民居研究』、中国建築出版社、2004年
- 荣成市民俗協会、荣成市新聞社、『荣成民俗』、山東画報出版、1997年
- 橋村 修、『漁場利用の社会史』、人文書院出版社、2009年
- 威海市地方史誌事務室、『当代威海市概覽』、当代出版社、2010年
- 安藤邦広、『茅葺きの民俗学—生活技術としての民家』、はる書房出版、1983年
- 祖父江孝男、大給近達、中村俊亀智、大塚和義、「物質文化研究の方法をめぐって」、1978年
- 岡 正雄、『日本の民具』、角川書店、1958年
- 坪郷英彦、『環境と人と草葺き屋根』、平成19-22年度科学研究費補助金基盤研究(c)成果報告書、平成22年
- 「中国年鑑」、<http://www.stats.gov.cn>
- 「威海市年鑑」、<http://www.weihai.gov.cn>
- 「山東省年鑑」、<http://www.sd.gov.cn>
- 「日本年鑑」、<http://www.stat.go.jp/data/nenkan/>

注1 「荣成民俗」の記述「清朝时期，逐渐有了一些鱼行，形成正规的渔业市场。鱼行是一个既有内部加工又有外部销售，还有加工生产的综合机构。荣成的渔民大致可分为三类：一类是古代靠打鱼靠海而居的人群。第二类是由于土地少，家庭劳动

力富余的农民构成。第三类就是农民自己的土地耕种收获基本可以糊口打鱼是作为副业，为了增加收入而已。」から、清朝時代から戦争や災害などの原因で被災者がこの地域に移住し集落を形成してきたことが明らかである。漁行の頭はまず海草屋を建て、集まった被災者が海草屋に住んだ。この被災者は漁行から雇用され、漁民になった。漁民は家賃を払ったという内容で漁業組織が村を作り、外から人々を雇い入れ海草屋に住まれて漁業に従事させた。

注2 中国の山東省沿岸部の海草の減少の原因として、以下の3点が考えられる。

第1点は、経済の発展に伴う工業排水、生活排水による陸域からの汚濁負荷の流入が飛躍的に増えたため、植物プランクトンが増加して透明度が低下した。その結果、アマモの生育できる海底まで光合成が可能な浅場の面積が減少した。

第2点は、臨海工業用地及び工業港湾整備を目的として浚渫と埋立てが行われ、湾奥の浅場が潰されたことである。

第3点は、近海で海産物を養殖するため、海草の生態環境を破壊したことである。

注3 曲栄国（1945年生まれ、栄成市港西鎮巍巍村）からの聞き取りによる。